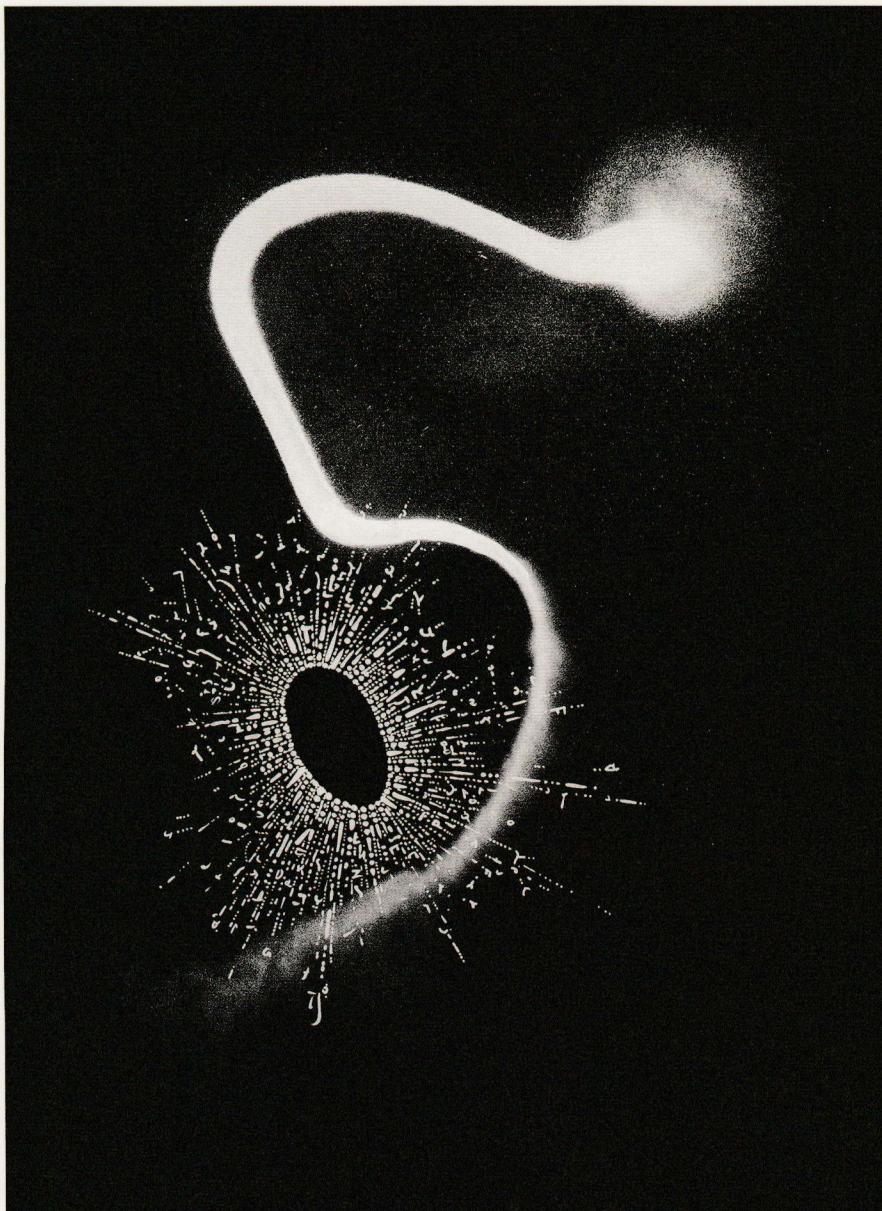


GLOBE AS A PALETTE

Contemporary Art from
The Taguchi Art Collection



62

Hiraku Suzuki

鈴木ヒラク／b.1978

GENZO #28

2014

silver spray paint, silver ink on paper
シルバースプレー、シルバーインク、紙

©Hiraku Suzuki



58

Hiraku Suzuki

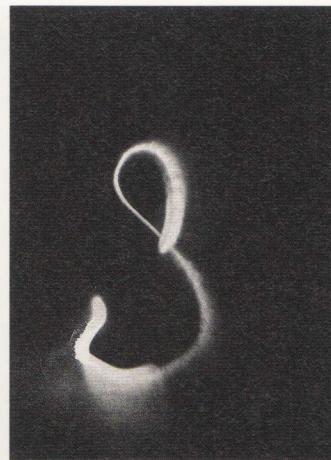
鈴木ヒラク／b.1978

GENZO #1

2014

silver spray paint, silver ink on paper
シルバースプレー、シルバーインク、紙

©Hiraku Suzuki



59

Hiraku Suzuki

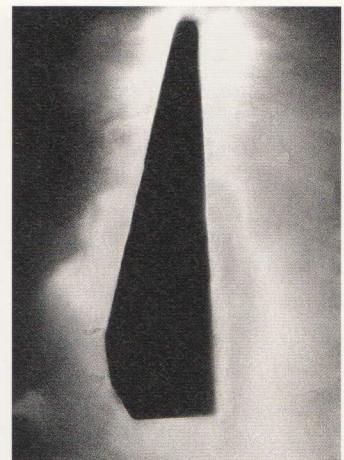
鈴木ヒラク／b.1978

GENZO #2

2014

silver spray paint, silver ink on paper
シルバースプレー、シルバーインク、紙

©Hiraku Suzuki



60

Hiraku Suzuki

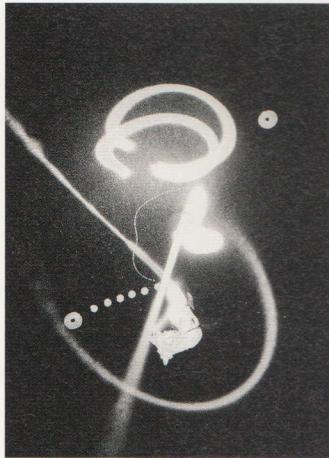
鈴木ヒラク／b.1978

GENZO #4

2014

silver spray paint, silver ink on paper
シルバースプレー、シルバーインク、紙

©Hiraku Suzuki



61

Hiraku Suzuki

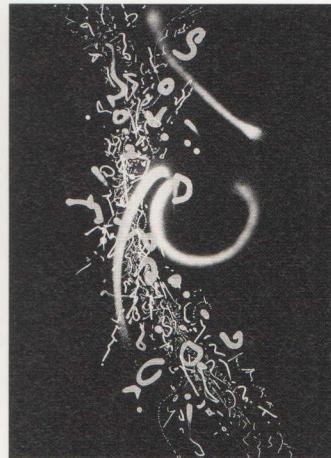
鈴木ヒラク／b.1978

GENZO #8

2014

silver spray paint, silver ink on paper
シルバースプレー、シルバーインク、紙

©Hiraku Suzuki



63

Hiraku Suzuki

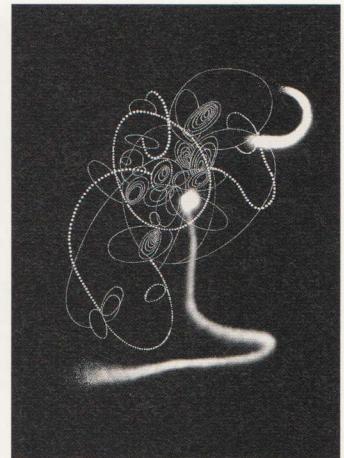
鈴木ヒラク／b.1978

GENZO #29

2014

silver spray paint, silver ink on paper
シルバースプレー、シルバーインク、紙

©Hiraku Suzuki



64

Hiraku Suzuki

鈴木ヒラク／b.1978

GENZO #84

2015

silver spray paint, silver ink on paper
シルバースプレー、シルバーインク、紙

©Hiraku Suzuki

を拠点に生と死、そして存在をめぐる哲学的な問いを根底におく作品に一貫して取り組む。自らの身体を用いた映像作品、毛糸を張り巡らせて緊張感の高い空間を創出するインスタレーション、ベッド、服、靴、窓枠、トランクといった生の痕跡や私的な記憶をにじませる素材などを通し、広く人々の心にはたらきかけ、ゆりうごかす表現を展開。世界各国の個展、国際芸術展で発表。2008年、第58回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。2015年、第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館代表。2019年、森美術館にて個展「魂がふるえる」。

塙田は「不在」をとおして「存在」について問おうとする。ベッドで人が寝るパフォーマンスを行った後、シーツを乱れたままにしておく。シーツに残された痕跡は、そこに確かに人が存在したことをうつたえかけてくる。本作のドレスは、着用者の姿はないものの、ポーズやしわはそのままに残され、そこだけ時が止まってしまったかのようだ。ドレスをとりまくのは、死や喪にも通じる「黒」という色彩。黒い毛糸が複雑に織りなす空間に宙吊りにされた白衣装は、無垢というよりは、はかなさという感覚をたちのぼらせる。作者の一貫したテーマである生と死、そして存在とは何かという問い合わせ、静かに浮かび上がってくる。(K.I.)

55 56

照屋勇賢／Yuken Teruya

《告知-森 (ティファニー)》2009年

《告知-森 (ラルフローレン)》2009年

pp.98-99

1973年、沖縄県南風原町に生まれる。1996年、多摩美術大学油彩科卒業。2001年、ニューヨークのスクール・オブ・ビジュアル・アーツ修士課程修了。「VOCA展2002」では、沖縄の伝統的な染物、紅型の着物に戦闘機やバラシュートなどの意匠をあしらい、基地問題や環境問題などを象徴的に表現した作品《結愛 you-i》を出品し、奨励賞を受賞した。現在、ニューヨークを拠点に活動している。

照屋は、トイレットペーパーの芯や紙袋など、日用品や身近なものを用いて作品を生み出す。代表作である《告知-森》シリーズでは、有名ブランドの紙袋やファストフード店の紙袋に切り込みを入れ、木の形を作り出した。ひっそりと佇む小さな木は、細かい切り込みによる精緻な造形と、袋の外から差し込む光で、まるでおとぎ話のような幻想性をたたえている。しかし視点を変えれば、そこには私たちの日常にひそむ、大量消費や森林破壊といった環境問題が示唆されている。

木を原材料とする紙を用いて木をかたどる。そこには豊かな発想力と、環境サイクルへのまなざしが示されている。(K.N.)

57

名和晃平／Kohei Nawa

《PixCell-Deer #51》2018年

p.100

1975年、大阪府高槻市に生まれる。京都市立芸術大学で彫刻を専攻し、同大学院で博士号取得。大学院在籍中にイギリスのロイヤル・カレッジ・オブ・アートに約7カ月間留学。海外も含めて制作の場を模索した結果、2009年に京都のサンドイッチ工場をリノベーションし制作の拠点とする。このスタジオ「SANDWICH」では、名和らがディレクターを務め、美術家やデザイナー、建築家、ダンサーなど、幅広い芸術家たちがチームを組んで協働する。多様な素材や技術の可能性が追求され、いくつものプロジェクトが並行して進められている。ギャラリーや美術館での発表はもとより、企業とのコラボレーションやパブリック・アートなど社会と深く関わる制作まで、精力的な活動が展開されている。

本作のタイトル「PixCell」は、Pixel(画素)とCell(細胞／器／粒)を複合させた言葉。デジタルカメラで撮影した光学的情報が画素(ピクセル)に変換され画像として保存される変容過程を、彫刻的な概念として置き換えて、提示するものだ。ここでは、モチーフの表面をさまざまな大きさのガラス・ビーズ(=セル)で覆うことにより、モチーフは本来の物質としての質感を消失し、輝く光の集合体へと変容する。名和は「彫刻はまさに目の前の現実そのものなので、その場で起こる体験が作品」と語っている。本展においては、来場者は、展示室内で、内部から発光するような鹿に遭遇することになる。名和は、ネットオークション上でキーワードを打ち込んで得られるものを実際に取り寄せて作品化する。「剥製」で検索すると鹿の剥製が多数ヒットするのだという。本作は釧路で製作されたエゾシカの剥製を使用している。(K.I.)

58 59 60 61 62 63 64

鈴木ヒラク／Hiraku Suzuki

《GENZO #1》2014年

《GENZO #2》2014年

《GENZO #4》2014年

《GENZO #8》2014年

《GENZO #28》2014年

《GENZO #29》2014年

《GENZO #84》2015年

pp.102-103

1978年、宮城県仙台市に生まれる。2001年、武蔵野美術大学造形学部映像学科卒業。2008年、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。2017年、札幌国際芸術祭に出品。現在、神奈川県を拠点に活動する。

ドローイングによる表現の可能性を拡大しようと試みる鈴木は、ドローイングと言語との関係性を主題とした制作を行ってきた。ときに、線描のみならず、写真、映像、铸造をはじめ多様な媒体を用いて、その探求を深めている。それらは造形であり、かつパフォーマンスであるという両義性を有するものであり、また、しばしばライブドローイングも行う。「絵とことばの間」にあるものと自ら定義づける彼のドローイングは、時間や空間を認識する通常の方法とは別の回路で世界をとらえ、新たな共通概念と記号の獲得を目指す行為と解釈し得る。

〈Genzo〉シリーズは、紙に幾何学的、または有機的なラインを描いたもの。路上や都市に氾濫するサインや記号への関心に加え、2014年の国東半島芸術祭に参加した時、トンネル内部の暗闇で黒い紙の上にスプレーを吹き付けて即興的に描いたことがこのシリーズの契機となった。〈Genzo〉の語は、“現像”という言葉の他に“原像”も指し示しており、近代において暗室の中で銀塩写真の現像を行なった歴史に加え、洞窟壁画において、顔料状の炭を吹きつけて手形を描いたいわゆる「ネガティップハンド」と呼ばれる技法を想起させる。

作品名が示唆するように、作家自身がドローイングという概念と行為を拡張し、太古から現代までの間に人類が生み出した視覚表現の手法を積極的に参照、検証していく意志がうかがわれる。(D.F.)

65

浅井裕介／Yusuke Asai

《あるくとである》2016年

p.104

1981年、東京都に生まれる。神奈川県立上矢部高等学校美術陶芸コースに学び、母校の空き教室を利用した制作等を経て、2005年、横浜市内のアーティスト共同ビル「北仲white」で同ビルメンバーと一緒に企画展を開催(翌年も)。斎藤祐平との「聞き耳」、浅井誠との「緑のはっぱ」などユニットによる活動、ダンサーやミュージシャン、建築家との協働、市民に制作に参加してもらうプロジェクトなど、多様な人々との連携による作品制作に、積極的に取り組む。

舗装道路用の白線素材を植物的かたちに切り抜き、地面に焼き付けて絵画を描く〈植物になった白線〉、マスキングテープを壁面に張り巡らし、その上にペンなどでイメージを描いて行く〈マスキング・プラント〉、制作する地で採取した土や水を用いて壁画等を制作する〈泥絵〉などのシリーズがあるが、マスキングテープをはがして絵画を「収穫」したり、泥をふき取って壁画を消すなど、生成から消滅までを含めて表現とする姿勢には、自然の循環のサイクルに照応するものがある。植物や動物のモチーフが、繰り返し描かれるのは、「いつも始めの一筆に引っ張ってもらいながら全

然別の形に進むようなところがある。(中略)そういう風に自分の絵を前に進ませてくれやすいから」だと語る。

本作は、2016年の個展「胞子と水脈」出品作。この個展では「消してしまうものの先にあるもの」として残る作品に挑戦したという。本来は2015年に北海道白老町の森の中の廃校を拠点とする「飛生芸術祭2015」で現地の土や水を使って制作された「泥絵」作品。飛生の森の中に置かれ、文字通り森の中を「あるくとあるく」作品として制作された。(K.I.)

66

大庭大介／Daisuke Ohba

《UROBOROS(spectrum)》2009年

p.97

1981年、静岡県袋井市に生まれる。京都造形芸術大学で絵画を学び、2007年、東京藝術大学大学院を修了。京都での学生時代、日本人として絵画を描くことの意味を問いつつ、寺院をめぐり伝統絵画を見続けた。そのなかで、狩野派や琳派の金地屏風が自然光の移ろいや蠟燭の明かりのもとで表情を変えることを体感し、大きな示唆を得る。「偏光パール」という、光が当たらないと色彩が感知できず、見る位置によっても見え方が変化する特殊な絵具を用い、固定されたひとつのイメージを表明する絵画ではなく、見る人と絵画の空間的な関係性(見る角度)の変化にともない異なる視覚体験をもたらす絵画に取り組んでいる。2011年のロンドンでの個展、堂島リバービエンナーレ、2012年、青森県立美術館での「超群島ーライト・オブ・サイレンス」など、国内外の個展やグループ展で意欲的に発表を行なっている。

本作は、2009年、初個展の年の制作。下地の白に、偏光パールにわずかに虹の7色を加えた色彩を用いている。平滑な地に厚みのある小さな四角いタッチを市松状にあらわし、さらにトゲ状の先端を持つタッチを重ねている。絵画表面にはきわめて繊細な凹凸が生み出され、7色の色彩とあいまって、眩惑的に変容する視覚体験を生み出す。本作は抽象的イメージだが、山、樹木、桜、氷瀑などの具象も取り上げる。また、この方法論にとどまることなく、ホログラム塗料の採用、ペイブレードや幅広のスキージーによる運動の軌跡の導入、新たな色彩としての黒による表現など、美術史への深い洞察と、緻密な造形的計算に基づき、方法論の不断の更新が続けられている。(K.I.)